

「昭和の鉛筆削り」

お茶の水女子大学附属小学校教諭

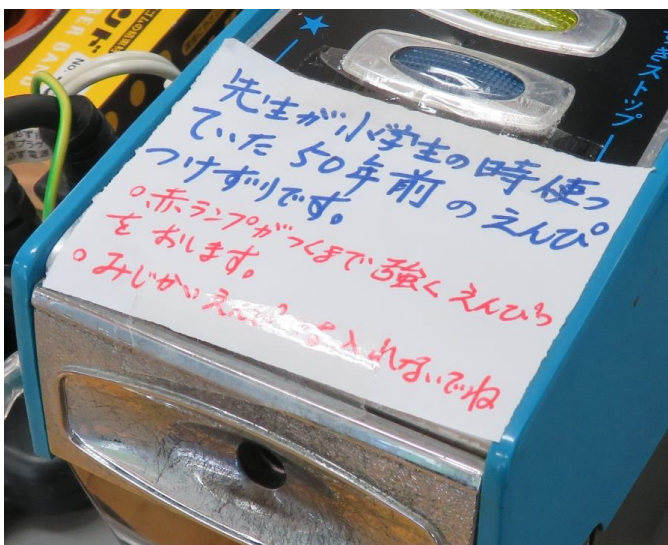
お茶の水女子大学サイエンス&エデュケーションセンター研究員

田中 千尋 Chihiro Tanaka

自宅の押し入れを整頓していたら、「昭和の遺物」が出てきた。電動鉛筆削りである。



この姿を見て、当時の記憶が蘇った。私が7歳か8歳の時に、新宿の京王で「わがままジャンプ」をして、母に買ってもらったものに違いない。当時(昭和40年代)、鉛筆は「肥後ナイフ」か「手回し鉛筆削り」で削るのが普通で、電動は珍しかったと思う。テレビでコマーシャルをやっていたのか、雑誌に広告が載っていたのだろう。友達に話したら、わざわざ鉛筆を持って、何人も家まで見に来てくれたのを覚えている。



さっそく、3年の教室に置いてみることにした。壊されそうなので、あらかじめ張り紙をしておいた。



芯先が太くなった鉛筆を挿すと、最初に青のランプが点く。子どもたちは、それだけで大興奮していた。



次に黄色のランプが点く。内部に豆電球が入っているのだろう。「わあ、この鉛筆削り、どこで売ってるんですか?」と口々に言う、売ってるわけない。



適度な細さになると、赤ランプで教えてくれる。たちまち行列ができていた。私が子どもの時と全く同じ興奮ぶりだ。しかも、この電動鉛筆削りには、太さ調整のダイヤルもついている。色鉛筆は「太い」に合わせて、削り過ぎを防げる。50年も前の電化製品が当時と同じ状態で完全に動くことに、私は驚嘆した。さすが「日本製」「ナショナル製」である。もうしばらく、教室で「第二の人生」を送ってもらおう。